

# 聖トマスに於ける esse と existere に ついて (完)

—existere の意味の探求・結論及追記—

山 田 晶

## 三三三

以上に於て我々は、トマスの本文に即しつつ、エクシステレなる語の用法を考察したから、次にはこれまで述べてきたことを要約し、そこからトマスに於けるエクシステレの本質的意味を抽象しよう。

第一に、エクシステレはトマスに於て、單に實在的存在のみならず、觀念的存在を示す爲にも用いられて居る。すなわち單に實在界に何らかの實在する事物「がある」ことのみならず、精神ないし知性のうちに觀念的なもの、つまり何らかの概念「がある」ことを示す爲にも用いられて居る〔本論文第五・第六章・哲研四三六號〕。

第二に、この語は單に實體的なものが自立的に存在する、すなわち自存する (subsistere) ことを示す爲に用いられるのみならず、また何らかの附帶的なものが實體的なものの「うちにある」(inesse) ことを示す爲にも用いられて居る。故にエクシステレはサブシステレと同義語ではなく、むしろサブシステレは實體的に特有なエクシステレの仕方を示す語として、すなわち一つの存在仕方 (modus existendi) を示す語として、エクシステレのうちに包含されるべきである〔第七・八章・哲研四三六號〕。

第三に、エクシステレは單に現實的存在のみならず、可能的存在をも示す。すなわち、單に現實的に何らかの事物

「がある」(esse in actu) ことのみならず、また「可能的」(esse in potentia) ことをも示す「第一〇—一四章・哲研四三七號」。

以上三つの結論よりして、實在的に、觀念的に、自體的に、他者に於て、現實的に、可能的に「ある」(esse in re, in intellectu, in se, in alio, in actu, in potentia) というかわりに、それぞれ「エクシステルする」といふ得ることが明になつた。ところで何らかのもの「あり」(esse) かは以上六つの場合につきる。ところがそのいづれの場合にもエッセのかわりにエクシステレが代置され得るのであるから、こゝからしてエッセとエクシステレとは全く同義語であると結論することができるよう思われる。——然しながらこのように結論するのは正常でない。なぜならばこの兩語は語原的に全然系統がことなり、エクシステレは獨自の意味の發展系列を有し、その系列の或段階に於て「がある」存在表示の意味があらわれ、この意味に於て同じく「がある」存在を示すエッセ (esse existentiae) と合致するのであるが、然しその合致よりしてエクシステレの意味一般とエッセの意味一般とをたゞちに同一視することはできないからである。故にエクシステレとエッセとの異同を明確にする爲には、「がある」存在を示すエクシステレの意味を、この語の意味の發展系列全體のうちに位置づけて考察しなければならぬ(第一五章・哲研四三七號)。

——この意圖のもとに我々は、この語を構成するエックスとシステレという二詞の意味の分析よりして、この合成詞がとり得る可能的意味を推定した後に(第一六—二二章・哲研四三八號)、それにもとづいてトマスに於けるエクシステレの用法を次の四群に分けて考察した。

第一に、一般的にエクシステレが「から出てくる」の意味で用いられる場合。——まづ(一)エックスの意味の強い場合には、起原表示の前置詞をともなつて文字通り「から出てくる」ことを示し、(二)システレがエックスと同等に強い意味を持つ場合には、單に「から出てくる」のみならず、その「出てきたもの」がそのものとして「立つに到る」ことが含意され、前後の事情に應じて「から生ずる」「から成立する」などと譯される。次に(三)エックスの力が弱まり

システレの力が残存する場合には起原表示の意味はうすれて、單に「生起する」「成立する」などの意味となる。更に四エックスもシステレともに意味が一般化すると、この語は單に「がある」という意味での存在を示すことになる〔第二三—二四章・哲研四三九號〕。

第二に、特に三位一體論に於てエクシステレが「から出てくる」の意味で使用される場合。——まづ(一)エックスの意味の強い場合には、この語は或ペルソナ「から」他のペルソナが「發出する」(procedere)ことを示す。(二)エックスとシステレとが同等に強い力を持つ場合には、この語は或ペルソナが他のペルソナ「から出てくる」ことのみならず、「出てきて」そのペルソナとして「自立して居る」ことを示す。(三)特にシステレの現存性(Da-sein)が強調される場合。或ペルソナが他のペルソナ「から出てきて」そこ「被造界」に「現存する」こと、すなわち派遣されること、を示す。(四)「そこに——現存する」意味から現存性がうすれて一般に「存在する」の意味となる。この第四段階はペルソナに關する固有な用法ではないが、第二群の意味の發展系列の終局段階として想定され得るのである〔第二五—二六章・哲研四三九號〕。

第三に、エクシステレが「あらわれる」の意味で用いられる場合。——まづ(一)エックスが強い意味を持つ時、この語は文字通り「あらわれる」「出現する」などの意味である。(二)システレがエックスと同じ強い意味を持つ場合。その時エクシステレは單に「あらわれる」ことのみならず「あらわれて」現實世界に「はたらいて居る」ことを示す。(三)エックスの意味が背後に退きシステレの意味が残る場合。その時エクシステレは「現存する」「現在する」などの意味となる。更に一般化すると(四)一般に「存在する」の意味になる〔第二七—二九章・哲研四四〇號〕。

第四に、特にシステレの意味が強調されて居る場合。まづ(一)文字通りの意味で「立つ」ことを示す。(二)「立つ」ということがより一般的意味に擴張される。この場合は時に應じて「存在する」「自立する」或概念がその概念として「成立つ」などの意味に用いられる。(三)「立つ」の意味が弱まつて廣い意味での存立を示す爲に何らかの補語を必要

とする場合。この時補語として名詞や形容詞が附加されて、「―として存立する」「―としてある」「―である」などと譯される。かゝるエクシステレの意味は、いわゆる繫辭としての「である」のエッセの意味に近い。(四)分詞エクシステンスは、繫辭の「である」のエッセの分詞エンスの代用として用いられる(第三〇章・哲研四四〇號・第三一―三二章・哲研四四二號)。

以上のように我々は、エックスとシステレという二詞の意味の様々な結合關係にもとづいて、トマスに於けるエクシステレの意味を四群に分けて説明したのであるが、もとよりかかる分類は絶対的なものでなく一つのこゝろみにすぎぬ。然し以上の説明によつて、エクシステレには「から出てくる」「成立する」「出現する」「存立する」等々の多様な意味があり、それらの意味の一つとして「がある」存在の意味もあるといふことは十分に明にされ得たと思ふ。——たと注意すべきは、これら諸々の意味のうち「がある」存在の意味の占める特別の位置である。すなわち、「がある」存在の意味は、單にこれら種々なる意味のうちの一つとして他の意味に對して對立的に區分されるのみならず、他の諸々の意味に對して或特殊の地位を占めて居る。すなわち他の諸々の意味は、エクシステレの構成詞たるエックスないしシステレに特別の強意が置かれる場合に生ずるのであつて、かゝる強意がことさらに附せられることなく、その意味が一般化すると「がある」存在の意味となるのである。ところで意味が一般化するということは、エックスとかシステレとかいう語の固有な意味がことさらに保持されることなく、一般的に擴張されて、凡そ何らかの意味に於ける(подамно)「から」ということ、ないし「立つ」ということがみとめられ得るすべての事態について、エクシステレということがいわれるようになることに外ならない。故に最も一般化されたエクシステレの意味としての「がある」「存在する」ことのうちにも、凡そ何らかの意味に於て理解されたところの「から出てくる」「出現する」「存在する」等々の意味が含まれて居るのであり、逆に「がある」「存在する」意味以外のエクシステレの意味は、この「がある」「存在する」の意味が一般的なかたちで含んで居る或意味の契機を、特に強調した場合と見る

ことができる。この意味に於ては「から出てくる」「成立する」「あらわれる」等々は、或特別の存在仕方 (modus existendi) に外ならぬともいわれ得るのである。——かくて「存在する」意味でのエクシステレは二様の意味にとることが出来る。一つの意味は、上述の各群の第四階段にあらわれてくるものである。この意味での「存在する」(エクシステレ) は、「から出てくる」「存立する」「あらわれる」等のエクシステレに對して對立的に分たれる。ところが他の意味に於ては、「から出てくる」ことも「存立する」ことも「あらわれる」ことも、悉く何らかの意味に於けるエクシステレに外ならぬこととして「存在する」エクシステレのうちに含まれると解される。しかもこの「存在する」エクシステレの二つの意味は絶對的に區別されるものではなく、前者はすべてのエクシステレの仕方 (modus existendi) からその一般性を抽象した場合のエクシステレであり、後者はすべてのエクシステレの仕方を包含した場合のエクシステレであるということが出来る。従つてエッセに對立するエクシステレの本質的意味をこれらエクシステレの種々なる意味様態から抽象しようとする場合には、我々はこれらすべての意味様態を包含するエクシステレ (廣義のエクシステレ) をその一般性に於て (狹義のエクシステレ) 考察しなければならない。

### 三四

次に我々は、前章の最後に述べられた原理にもとづいて、これらすべてのエクシステレの意味から、「存在する」エクシステレの意味の本質性を抽象しよう。それは次の四點に要約され得ると思われる。

第一に、この語は状態ではなくては、たらきを意味する。——それはこの語の構成詞たるシステレの意味に由来する。すなわちもしこれがスターレであつたならば、エクスターレは「出てきて居る」状態を示してあらうが、システレであるエクシステレは、單に「出てきて—立つて居る」状態ではなくて、「から出てくる」「から成立つ」「あらわれる」などというはたらきを示すことになつた。この語の意味が一般化して、いわゆる「がある」「存在する」の意

味となる場合に於ても、上記の諸々の意味はごく一般的なかたちで含まれて居るのであるから、従つてエクシステレは、單に「がある」「存在して居る」という状態ではなくて、「ある」「存在する」といふはたらきを示すことは明である。我々はこれをエクシステレの活動性（二）と名づけよう。

(一) システレとスターレとの意味の相違、及びそれにもとづく論議同志間の意味の相違に關しては、エクシステレの語原的分解の項に於て論ぜられた。本論文第一六一—二〇章・哲研四三八號參照。——はたらき (Operatio) と状態 (habitudō, habitus, dispositio) はどちらも事物の現實的であり方であることに於て共通する。然しはたらきが今現實に何らかのはたらきを「なす」ことであるに對して、状態はそのような状態に「ある」こと、すなわち何らかの現實的ありかたの持續性を示す。エクシステレがはたらきであることは、エッセとエクシステレとを區別する一つの重要な點である。なぜならばエッセはエクシステレと同じ意味ではたらきであるということができないからである。このことについては後述する。

第二に エクシステレというはたらきは、すべてのはたらきに共通する最も一般的な、また最も基本的なはたらきである。——凡そ現實的なるものは現實的である限りに於てさまざまのはたらきをして居り、それらさまざまのはたらきの多様性に應じてさまざまの事物が區別されるのであるが、凡そ現實的なるものである限り必ず持つ筈のはたらきがある。それはエクシステレ（存在）するはたらきである。流れるものも走るものも食するものも考えるものも、まづ存在するものでなければならぬ。存在するもの必ずしもすべて流れるわけではない。然し流れるものは流れるものとして存在しなければならぬ。存在するもの必ずしもすべて考えるわけではない。然し考えるものは必ず考えるものとして存在しなければならぬ。このように存在することはすべての現實的はたらきの第一前提であり、すべてのはたらきのものである。我々はこれをエクシステレの共通性と名づけよう（二）。

(二) エクシステレという動詞がすべてのはたらきのうち最も基本的一般的なはたらきを意味するようになったこともその語原に由来する。すなわちエクシステレはもと「から出てくる」ことを示したが、「から出てくる」ことは生成し成立することに外ならぬ。ところが生成することは、すべてのはたらきに共通するものをいふならわして居る。なぜならば我々の住むこの現象界に於ては、はたらくことはすべて何らかの意味で生成することだからである。というわけは、いかなる「はたらき」も何ら

かの意味での「動き」であるが、動くことは少くとも我々の住む現象界に於ては何らかの意味で生成することだからである。このようにしてエクスシステレは、すべてのはたらきのうち最も共通的一般的なはたらきを意味することになった。……トイヌは諸所に於て「有るもの」(エッセ)を三つの段階に区分する。第一は、存在するもの(existens)；第二は生物(vinens)第三は知解者(intelligens)の段階である。すべて有るものは存在する。然し必ずしも生きたり知解したりするとは限らぬ。すべての生物は存在しかつ生きて居る。必し必ずしも知解するとは限らぬ。ところがすべて知解するものは存在しかつ生きて居る。このようにエクスシステレということは、すべての現実的に共通的基本的なはたらきである。また同じことをいふ爲にエクスシステレのかわりにニッセが用いられる場合もある。この場合のエッセは「生きる」「知解する」などのはたらきに對立するはたらきとして把握されたエッセであつて、明にエクスシステレと置換えられる。エクスシステレの用いられる場合。De pot. g. 5, a. 9, ob. 10. *elementa sunt tantum existentia, plantae autem etiam vivunt, animalia vero etiam super haec cognoscunt.* 元素はたゞ存在(エクスシステレ)するだけのものである。植物はたゞその上に生きて居る。動物はたゞその上に認識する。……ここではエクスシステレは生きぬ(vivere)；認識する(cognoscere)といふはたらきに對立するはたらきとしてあげられて居る。エッセの用ゐられる例。In De Div. Nom. c. 4, l. 1, n. 263. *Si autem ipsae res in se considerentur: primum et communis, quod in eis invenitur, est esse; secundo, vivere; tertio, cognoscere; quarto iustum esse vel virtuosum.* もし事物それ自身が考察されるならば、事物のうちに見出される第一の、最も共通的なものは「有る」「存在する」(エッセ)であり、第二は「生きる」ことであり、第三は「認識する」ことであり、第四は正しくあること、ないし有徳であることである。

然しながら第三に 上記の如くエクスシステレがすべてのはたらきに共通する最も基本的なはたらきであるといふことは、このはたらきが最も根源的なはたらきであることを意味しない。なぜならばエクスシステレは、原因としてのはたらきではなくて結果としてのはたらきであり、従つてそのはたらきの成立つ爲に何らかの原因を必要とするからである。——このことは既に述べられたように「第一六章新四三八號」、エックスなる接頭辭の意味から由來する。この接頭辭に限定されてエクスシステレの意味は「から」出てくる、出現する、現象する等々となつた。これらの意味のうちには明に「そこから」エクスシステレしてくるその「もと」なるものへの關聯が含まれて居る。従つてこれらの意

味を最も一般的なかたちで含んで居る「がある」存在の意味のうちにも、その存在原因に對する何らかの關聯が含まれて居る。すなわちエクシステレすることは「から出てくる」はたらきである以上、原因としてのはたらきではなくむしろ原因によつてひきおこされたはたらきであり、従つてエクシステレは「それを原因として」エクシステレする原因を前提し、その原因の結果としてエクシステレということはエクシステレすると考えられる。——ではエクシステレの原因はいかなるものであるか。エクシステレははたらきであるとするれば、その原因ははたらきでなければならぬ。ところではたらきには能動因 (causa agens) と形相因 (causa formalis) という二つの原因が指定される。前者ははたらくものをしてそのはたらきをなさしめる他者としての原因であり、後者ははたらくものに内在し、はたらくものがそれにもとづいてそのはたらきをする内在原理としての原因である。たとえば或ものが「熱する」という現實的はたらきは、そのものに内在する熱の形相にもとづいておこるとともに、「熱する」はたらきはそのはたらきをその或ものに生ぜしめる他者の能動的はたらきかけを必要とする如くである。同じ關係を「存在する」はたらきに適用するならば、存在者はそのものをして存在せしめる他者によつて (a quo)、そのものに内在する存在原理にもとづいて (onb) (存在する、といわれ得る。前者は存在の能動因、後者は存在の形相因である。このようにエクシステレというはたらきは、二つの原因への必然的な關聯のもとにはじめて現實的となるのである。——ところで今存在の能動因の方は一應考慮外において、存在の形相因の方に注目しよう。それは「存在者がそれにもとづいて存在する」(onb existens existit) といわれるものである。故にそれは存在者に内在する存在活動の内在原因として形相的に把握された存在そのものである。それ故我々は、「存在者は〔形相的〕存在にもとづいて存在する」ということができる。またこの主語と述語動詞のうちに用いられて居る「存在」という語のかわりにエクシステレという語を置き換えて、「エクシステレするものは〔形相的〕存在にもとづいてエクシステレする」ということもできる。然しながらこの形相的存在をエクシステレといふかえて、「エクシステレするものはエクシステレによつてエクシステレする」といつてはなら



ない。なぜならば、エクシステレとはもともと何らかの原因「によつて、にもとづいて、から」存在することを意味する。然るに形相因としての存在は「それによつて」存在者が存在する原因として自らは「—によつて—存在する」すなわちエクシステレすることはない。故に結果としての「存在する」ことはエクシステレといつてよいが、エクシステレの原因としての存在をエクシステレということとはできぬのである。このエクシステレならざる形相因的存在こそはトマスがエッセと呼ぶところのものである——それ故「エクシステレするものはエッセにもとづいてエクシステレする」という命題は正しい。然し「エクシステレにもとづいてエクシステレする」ということはできない。事實トマスは前に類する表現はしばしば用いるが後の表現は絶対<sup>(五)</sup>に用いて居ないのである。要するに、エクシステレというはたらきの原因はエッセであり、エクシステレはエッセの結果である。故にエッセとエクシステレとの混同は原因と結果との混同を誘致するであろう。——ではエクシステレするものにとつて、そのエクシステレすることの内在的形相因としてのエッセとはいかなるものか。我々はさきにエクシステレははたらきであるといつた。従つてエクシステレするはたらきの形相因たるエッセは、それにもとづいて、エクシステレするはたらきが現成する根原として、エクシステレすること以上に「はたらき」の性格を有するともいわれ得るであろう。然しそのはたらきは、エクシステレがはたらきといわれると同じ意味で「はたらき」ということはできない。なぜならば、はたらきは何かの仕方<sup>(六)</sup>で現象するものである。ところが現象は多様であるからそれに應じてはたらきの仕方<sup>(六)</sup>も多様である。故に現象的はたらきを意味するオペラチオ(operatio)という名詞は、現象的にはさまざまの具體的な個々のはたらきとしてエクシステレし、従つてそれは複數的にオペラチオーネス(operaciones)である。ところがこれに反しはたらきの原因としてのエッセそのものは、それにもとづいてこれら諸々のオペラチオーネスが現成(エクシステレ)する根拠として、現にはたらきつゝある事物の内奥にあり乍らしかもそれ自ら現成(エクシステレ)することがない。故にそれはすべてのはたらきの原因である限りに於てはたらきの性格を有し、いやむしろはたらきの性格そのものでありながら、それはオペ

ラーチオの名で呼ばれ得ない。トマスがエッセをアクツス (actus) といつてオペラーチオと呼ばないのはこの故である。従つてエッセとエクシステレとの混同はアクツスとオペラーチオとの混同を誘致するであらう。<sup>(六)</sup>——次に、エクシステレすることは我々にとつては最も現實的なことである。なぜならばすべての事物はエクシステレする限りに於て現實的に我々と關り合いを持つのであるから。然しながらエクシステレするもの自體に即して考えれば、エクシステレはエッセを原因としてひきおこされるのであり、しかも原因は結果よりも現實的であるから、エッセはエクシステレ以上にその事物にとつて現實的でなければならぬ。エッセのはたらきの性格を示すアクツスという名稱が同時に現實態の意味を含むのはその故である。エッセとエクシステレとの混同は上記の相違を無視することによつて、現象的現實と原因的現實との混同を誘致するのであらう。現象するものは勿論現實的である。然し現象するもののみが現實的であるわけではない。現象するものを現象せしめて居る原因も現實的であり、否或意味に於てはより以上に現實的である。なぜならば現象せしめる原因が現實的に存在しなければ、現象するものの現實的存在もあり得ないのであるから。現象するものの現實性の認識は、現象の根原にある現實的なものの認識への端緒にすぎぬ。エクシステレの認識はエッセの認識への端緒にすぎぬ。エッセとエクシステレとの混同は、現實性と現象性との混同によつて、より深き現實性の認識への道を遮斷し、我々の現實性の認識を平面化するであらう。<sup>(七)</sup>——以上我々はエクシステレの原因としてのエッセを三つの點から特徴づけた。第一に、エクシステレの原因としての存在はエクシステレと呼ばれずエッセといふべきであること。第二に、エクシステレするはたらきの原因としてのエッセははたらきの性格を有するが、それはオペラーチオではなくアクツスと呼ばれるべきこと。第三に、現象するエクシステレの根源としてのエッセはエクシステレ以上に現實的であること。トマスがエッセを *actus essendi* という名稱をもつて呼ぶ場合、この名稱は以上三つの意味を含んで居ると思われる。——さて我々は以上のようにエクシステレの原因としてのエッセについて述べてきたのであるが、これらのことは後にエッセそのものについて論ずる時、別の角度からもつと詳細に論ぜら

れねばならぬ。今我々はエクシステレが原因のはたらきでなく結果のはたらきであるということからして、原因としてのエッセの性格に言及したにすぎないのである。故に我々は何れにもどつて、このエクシステレの第三の本質的性質をその結果性と名づけよう。

(三) De causis. 1. 26. Est autem duplex causa essendi; scilicet forma per quam aliquid in actu est, et agens quod facit actu esse. 「有る」ことの原因は二様である。すなわちそれを通じて、何れかのものが現質的に「有る」ところの形相と、そのものを現質的に「有ら」しめる能動者とである。——このトマスが causa existendi 「存在原因」といわずに causa essendi 「有ることの原因」といって居るのは、このエッセとどう語らざるに「有る」がある「エクシステレ」の意味のみならず「である」エッセの意味をも含ましめて居るからである。故にものが「有る」爲に二つの原因が必要だということとは、この「有る」がものが存在するの意味にとつても何れかのもの「である」の意味にとつても妥當する。

(四) 存在の能動因、すなわち存在者をして存在せしめる他者としての原因は究局的には神である。故に神は万物を有らしめる第一原因である。故にトマスに於けるエッセならばにエクシステレの意味を理解する爲には、究局的にはエッセそのものとしての神の考察にまでもむかへねばならぬ。然し今我々の問題として居るのは事物そのものの存在論的契機としてのエッセ・エッセ・センチア・エクシステレ・エッセの關係であるから、さしあたって探究の對象を存在の形相因としてのエッセに局限するわけである。それは存在の能動因に對する考察が不要だからではなく、たゞ證論の混雜をさける爲に外ならぬ。万物の存在原因としての神については神學大全第一部四四論題に詳しい。なおその箇所については本論文第二章(c)項・哲研四三五號二〇頁以下に若干言及された。

(五) たとえば次例を見よ。——(1) De verit. 9. 22. a. 10. rem in suo esse existentem そのエッセに於てエクシステレするものを云々。この場合「エッセに於て」といふことは「エクシステレするものがそれによつて現質的にエクシステレすることの現實性である。トマスはこうして「そのエクシステレに於て」(in suo existere) とか「そのエクシステレンチアに於て」(in sua existentia) エクシステレする」といふことに「そのエッセに於て」といふ居ることに注意せよ。——(2) De pot. q. 7. a. 5. illum modum essendi quo res inanimatae existunt. それに於て(quo) 無生命のエクシステレするものがあるエッセの仕方、云々。エクシステレの仕方(modus existendi) といふのは、(quo) De princ. naturae. n. 1. Subjectum enim dat esse accidenti, scilicet existendi, quia accidens non habet esse nisi per subiectum. 基體は

附帶有にエクシステレのエッセを與える。なぜなら附帶有はたゞ其體を通じてのみエッセを持つのであるから、云々。このエッセステレとエッセとは明確に區別されて居る。すなわちエッセはエクシステレといふはたらきがそれにもとづいて現實的となる現實性として把握されて居る。こゝで「附帶有に附帶有にエクシステレとエッセとの區別」とか「エクシステレとエッセとの區別」とか「後期のスコラ學者ならば必ずいふべきこと」云々の注を注意せよ。——(4) In De Div. Nom. c. 11, l. 14, n. 931. dicuntur... existentia, inquantum participant esse. エッセを分有する限りに於て「エクシステラチア」〔存在者〕といわれ、云々。この場合のエッセは、それを分有することによつて存在者が存在者となる原理として存在を示すエッセであるが、やはり「エクシステレないしエクシステンチアを分有する限りに於て」といわれぬことに注意せよ。

(六) アクツスとオペラチオとは區別されねばならぬ。どちらも語源的には「はたらき」を意味する。そしてはたらくことは現實的であるから、單なる可能態としてのポテンチアに對してはどちらも現實態としてある。故にアクツスもオペラチオもポテンチアに對する現實態としてのアクツス〔廣義〕のうちに含まれる。然し事物の個々の具體的現實的なはたらきがオペラチオであるに對して、アクツスはかゝるはたらきがそれにもとづいてあるところのその事物に内在する形相として把握されて居る。アクツスは第一現實態 (actus primus) オペラチオは第二現實態 (actus secundus) と云われる。 II Sent. d. 35, q. 1, a. 1. Est autem duplex actus vel perfectio, scilicet actus primus et actus secundus. Actus primus est ipsa prima forma; actus secundus est ipsa operatio.——エッセはアクツスであるが、それは第一現實態であつて第二現實態としてのオペラチオではない。 I Sent. q. 3, d. 33, q. 1, a. 1. Alio modo dicitur esse ipse actus essentiae; sicut vivere, quod est esse viventibus, est animae actus; non actus secundus, qui est operatio, sed actus primus.——トマスがエッセは各事物にとつて最も内奥的なものであるといふ言葉も、エッセを第一現實態としての事物の形相として把握する時はじめて理解を得るべきであらう。 I q. 8, a. 1. Esse autem est illud quod est magis intimum cuiuslibet, et quod profundius omnibus inest, cum sit formale respectu omnium quae in re sunt. 既述の如く〔本論文第二章註(三)哲研四四〇號〕の箇所をシマンは Le Thomisme, p. 58. L'exister est ce qu'il y a de plus intime en chaque chose... と譯した。然しエクシステレといふことはエッセのあらわれであつて決して事物の内奥的なことではない。むしろそれはエッセのあらわれとして事物にとつて最も表面的なことといわれねばならぬ。だからこそ我々が事物について最初に知ることは、そのもの「がある」こと、すなわち事物のエクシステンチアなのである。

(七) かゝる現實性の認識の平面化は、トマスに於けるエッセの現實的性格に對する顧慮を見失ひ、エッセとエッセンチアとの區

別を單に存在者の概念の含む存在論的構成要素たるエクシステンチアとエッセンチアとの概念的區別の問題に解消した後期のスコラ哲學の性格を形成するものである。

第四に、エクシステレは常に何らかのもの何らかの意味に於ける存在性を示す。——このことはシステレの原意に由來する。システレの原意は「立つ」ことであるが、「立つ」ことは常に、何らかのもの「として」他者から區別されて「立つ」ことである。従つてエクシステレするものは必ず何らかの意味で他者から區別されたそのもの「として」エクシステレするものでなければならぬ。<sup>(A)</sup>最も固有な意味で他者と區別されてそのもの「として」立つといわれ得るのは實體、すなわち自體的にあるもの (per se ens) である。故に最も固有な意味でエクシステレするのは實體であり、この實體のエクシステレの仕方をサブシステレといふのである〔第七章・哲研四三六號〕。然しながら他者から區別されてそのもの「として」あるのは單に實體のみではない。實體「に於てあるもの」(ens in alio)、すなわちもろの附帶的有も、やはりかかるもの「として」他者から區別されてある。たとえば「赤」は實體ではないが赤「として」他者から區別されてあるし、「關係」もまた實體ではないが「關係」として他者から區別されてある如くである。故にこれらのものも何らかの仕方でのエッセを持つ限り、そのエッセによつてエクシステレする筈である。諸々の附帶性についてエクシステレするといふことがいわれるのはこの故である〔第八章・哲研四三六號〕。のみならず「缺如」とか「否定」の概念は實體でも附帶有でもないが、やはりそのもの「として」他者から區別して思惟され得る。故にこれらのものは實在として實在的なエッセ (esse reale) を持たないが、概念として知性のエッセ (esse intellectuale) を持つ限りに於て、知性に於てエクシステレするといわれ得る。實在しないもろもの概念についてエクシステレという語の用いられるのはこの故である〔第六章・哲研四三六號〕。——要するに何らかの意味で他者から區別されてそのもの「として」考えられ得るものはすべて、何らかの意味でエクシステレし得るのである。逆にエクシステレということは決して單獨にはあり得ず、必ず「何かあるものが」エクシステレすることとしてエクシステレ

する主語を前提する。このようにエクシステレというはたらきは、そのはたらきの主體としての或限定されたものへの關係を本質的に含んで居る。<sup>(九)</sup>——ところでエクシステレの主語となるものは、實在するものであれ單に概念的に思惟され得るにすぎぬものであれ、他から區別され何らかの意味で限定された或ものとして、そのものがそのもの「として」ある爲の何らかの規定性を持たねばならぬが、その規定性はその何かが實體ないし附帶有の場合には、その實體ないし附帶有の本質 (*essentia*) であり、實在界に何らの根據も持たぬ諸概念の場合には、その概念をその概念として他の概念から區別して成立たしめるその概念のラチオである。<sup>(一〇)</sup>故にエッセンチアないしラチオは、それが何らかの意味でのエッセを持つ限りまた何らかの意味でエクシステレすることができる。——さてエッセンチアとラチオとの區別はそれ自身大きな問題であるが、どちらも或ものをしてそのもの「何か」を規定する規定性であることに於て共通する。故にエクシステレのはたらきは必ずエッセンチアないしラチオによつて規定された何らかの主語への關係を含む。これがエクシステレの第四の本質的特性である。

(八) エクシステレの存立性については第三〇—三二章・哲研四四〇號四四二號に於て論じた。

(九) エクシステレは常に「何か」がエクシステレする」というように何らかの主語に對する述語動詞として用いられる。故に「神はエクシステレする」といわれ得ても、「エクシステレが神である」とはいわれ得ぬ。かゝる表現は無意味である。これに反してエッセはそれによつてエクシステレする現實性として、「エッセは神である」といわれ得るのである。

(一〇) エッセンチアはものの「何か」を規定するものとして何性 (*quidditas*) といわれる。もしもエッセンチアの定義が單にそれだけであるとすればエッセンチアということとは全然實在しないものについていわれる筈である。然しエッセンチアは實在界に何らかの措置するものであるとされて居る。De ente, c. 1, n. 2: Sed primo modo non potest dici quod aliquid in re ponit; unde primo modo caecitas et huiusmodi non sunt entia. Nomen igitur essentiae non sumitur ab ente secundo modo dicto; aliqua enim hoc modo dicuntur entia quae essentiam non habent, ut patet in privationibus; sed sumitur essentia ab ente primo modo dicto. 故に何らかの仕方では實在しうるものについてはその何かを規定するものはエッセンチアといわれるが、實在しないものについてはエッセンチアということはできぬ。故に盲目とか否定とかいふものにはエッセンチアはないわけである。然し盲目や否定や、その他無数の非實在的なものにつ

ても、それらがかゝるものとして思惟される以上その「何か」を規定する規定でないし形相性はある筈であり、それがラチオといわれる。勿論ラチオは非實在的なもののみ固有なものでなく實在するものにもラチオはあり、従つてラチオの方が、エツセンチアよりもより広い範囲の規定性ないし形相性をふくむ。後にエツセに對するエツセンチアの關係のみならずエツセとラチオとの關係及びエツセンチアとラチオとの關係が問題とされねばならぬが察をさけて以下の論究ではエツセンチアのみを問題としラチオとの關係は以上の言及だけにとゞめておく。

以上に於て我々は、エクシステレのうちに含まれて居る四つの本質的性格をあげた。これらの性格の考察は我々にエクシステレをエクシステレ自體として他者からきりはなして理解することは不可能であることを教える。すなわちエクシステレは上述の諸特性によつて他のものないしことと本質的に聯關し、そのものないしこととの關聯に於てのみ理解され得る。第一に、エクシステレははたらきであることよりしてはたらきの主體との本質的關聯を有する。第二に、エクシステレはすべてのはたらきに共通的基本的なはたらきとしてすべてのはたらきに關係する。第三に、エクシステレは結果としてのはたらきであることよりして本質的にその原因としてエツセに關係する。第四に、エクシステレは何か或限定された主語「がエクシステレする」こととして、何らかの本質のないし概念的に規定された主語への關係を必然的にもなう。——それ故エクシステレといふことは決して單獨にはおこらず、常に、何らかの本質的概念的に規定されたもの、「主語」が、そのエツセによつて、「原因」エクシステレする、「結果」といふ事態としておこる。この命題から逆にエクシステレを定義するならば、エクシステレとは、何らかの本質的概念的に規定されたものが、そのエツセによつて現象するところの最も基本的なはたらきである、ということができよう。

### 三二五

これまでのところで、我々はトマスに於けるエクシステレの意味を、本文に即して考察し、ついでそこからこの語の意味の本質を抽象したのであるが、以上の結論が我々の探究の課題全體にとつていかなる意味を持つか、それは我

々の探究の課題に對してどれだけの解答を與えたか。我々にはなおどれだけの探究すべきことが殘されて居るかを明にする爲に、もう一度この論文のはじめに立返り、主なる問題點について想起して見ることにしよう。

トマスに於けるエッセの意味をなし得る限り明にすること、これが我々の主題である。その爲に我々は、エッセとしばしば混同されるエクシステレの意味をてがかりにして、エクシステレとの比較に於てエッセの意味を理解しようとするのである。ところでエッセとエクシステレとの關係については次のような問題が存する。すなわちトマスに於てエッセとエッセンチアとの區別とされたことが、トマス以後のスコラ哲學に於てエクシステレないしエクシステンチアとエッセンチアとの區別の問題として論議されるようになり、ジルソンの如き人もトマスのエッセのエクシステレ性を強調する、然しトマス自身はエッセンチアに對してはいつもエッセを用い決してエクシステレを用いない、ということである。これは一つの歴史的事實として認定され得るであろう。——そこでこの事實をめぐつて我々には、トマスに於けるエッセンチアに對するエッセをエクシステレと置換えることが果して正當であるか、という問題が生ずる。まづ傳統的ならびにジルソンの解釋に從つて正當であるとすれば、(一)トマスのエッセはエクシステレと同じ意味であることが實證されねばならぬ。(二)なぜトマスはエッセのかわりにエクシステレを用いなかつたかの理由が明にされねばならぬ。——これに反しもしこの解釋は正しくなく従つてエッセとエクシステレとは區別されるべきだとすれば、(一)エッセンチアに對する意味でのトマスのエッセがエクシステレの意味でないことが實證されねばならぬ。(二)トマスのエッセはいかに理解されるべきかが示されねばならぬ。(三)エッセ、エクシステレ、エッセンチアの關係を明にしなければならぬ。(四)エッセとエッセンチアとの對立をエクシステレないしエクシステンチアとエッセンチアとの對立として把握するトマス以後の解釋は何故生じたか、またそれはいかなる意義を有するか、が明にされねばならぬ。

あらかじめ結論をいえば、我々はエッセとエッセンチアとの對立關係をエクシステレないしエクシステンチアとエッセンチアとの對立關係に置換える傳統的解釋ならびにジルソンの解釋に對して反對であり、エッセとエクシステレ



とはあくまで區別されねばならぬと考えるのであるが、この考えを立證する爲に、我々はまづ傳統的解釋の立場に於て、いかなる根據にもとづいてエッセがエクシステレであるといわれるか、またトマスがエッセのかわりにエクシステレを用いない理由はどのように説明されるかを吟味し批判する仕事にとりかゝつたのである〔本論文第一章・哲研四三五號〕。

(一) トマスのエッセはエクシステレであることの證明。——このことを實證する爲にしばしば引用されるトマス本文の有名な五つの箇所を検討し、かつこれらの箇所に對する權威ある學者たちの解釋を参照した。彼らの説明はすべて、これらの箇所に於けるエッセがエクシステレ（存在）を意味することを注意して居る。我々も彼等の說に或意味で同意する。然しながら若干の疑問を残す。その疑問の一つはこれである。すなわち、なるほどこれらの箇所に於てトマスは明に、エッセンチア「ないしそれにあたるもの」はエッセによつてエクシステレする、ことを教えて居る。故にこゝから、エッセとはそれによつて「あるいはそれにもとづいて」(onb) エッセンチアがエクシステレするものである、ということとはできる。然しながら果してそこから直ちに、故にエッセはエクシステレである、と結論してよいか、という疑問である〔第二章・哲研四三五號〕。

(二) 次に、なぜトマスはエッセンチアに對して常にエッセを用いエクシステレを用いないか。——これに對してジルソンは二つの理由をあげて答えて居るが、なかんづく重要なのは第二の理由であつて、それによればトマスの時代にはこの語はまだ、後に用いられるようになった現實存在「がある」を示す意味には用いられて居なかつたからである、という。我々はこのジルソン説を吟味する爲に、トマスの本文にあたつてそのエクシステレの用法をしらべねばならなかつた〔第三章・哲研四三五號〕。その結果得られた結論は次の三つに要約される。

(一) トマスに於てエクシステレは、既に現在用いられて居る現實存在「がある」を表示する意味で用いられて居る。故にこの點に關してはジルソン説は誤つて居る。従つてジルソンのように、トマスに於てエッセは實質的にはエ

クシステレの意味〔現實存在的〕であつたが、彼の時代にエクシステレはまだその意味に用いられて居なかつたから、エッセンチアに對してエクシステレを用いなかつたのである、という説明は許容し難い〔第一章・哲研四三七號〕。

(I) トマスのエクシステレは「實在的にある」(esse in re) ことだと解したシユエツ説も、「現實的にある」(esse in actu) ことだと解したデフェラリ説も、どちらもトマスのエクシステレの意味の説明としては不十分であることが見出された。而してこれらの説明の缺陷は、彼らがトマス本文に即してトマスに於けるエクシステレの意味を明にしようとして、エッセとエッセンチアとの關係は、エクシステレとエッセンチアとの關係と同じであるとする傳統的スコラ哲學的トマス解釋に、無批判的に盲從したところから生じたものと思われる〔第四章・哲研四三六號・第一〇一—一五章・哲研四三七號〕。

(三) トマスのエクシステレの用例の本文にもとづく考察から、その種々なる意味、特にそれらの意味のうち「がある」存在を表示する意味の占める位置、エクシステレの意味の本質的特性、エッセ及び主語に對する本質的關係等が認識された〔第二—三三三章・哲研四三九—四四二號・第三四章・哲研本號〕。こゝからエッセとエッセンチアに對するエクシステレの關係を理解するいとぐちがつけられたように思われる。

以上がこれまで探究されてきたことの總括である。要するこれまでに我々は、エッセはエクシステレであるとする解釋の線に即しつゝ、この説をトマスの本文にもとづいて吟味し批判し、その過程に於てトマスに於けるエクシステレの種々なる意味を考察してきたのであつた。その結果、エッセとエクシステレとを同一視する傳統的解釋の基礎は必ずしも確固不動のものでないということは、かなり明にされたと思われる。然しながらエッセとエクシステレとは區別されねばならぬという積極的理由はまだ提出されて居らず、またこれまでエクシステレについて考察されてきた範圍内に於ては、エクシステレの現象的な個々の意味はその個々の用例に即して示されたとはいへ、その本質的意味はまだ十分に説明されて居らぬ。而してエクシステレの本質的意味の解明は、これまでの我々の探究の結論が教える

ように、エクシステレをエッセとエッセンチアとの關係に於て考察することによつてのみ可能である。かくて我々に殘されて居る問題は、今度は我々自身の主張に立脚して、(一)エッセはエクシステレに非ることを實證し、(二)エッセの意味を説明し、(三)エッセとエクシステレ及びエッセンチアとの關係を明にし、(四)我々の立場からエッセに對する傳統的解釋の意義を解釋することである。——さてかゝる探究が確實なる實證的根據にもとづいて遂行される爲には、我々は次にトマスに於けるエッセ及びエッセンチアの意味について、さきにエクシステレについて行つたと同程度の、否それ以上の忍耐強い實證的探究を必要とするであらう。かくて我々の探究は、トマスに於けるエクシステレの意味から、エッセの意味の用例にもとづく探究へと移行するのである。

## 追記

以上によつて、エクシステレの意味の探究の項は終つたが、既に本誌に掲載する分としては予定の枚数を超過したので、一應これをもつてうちきりとし、殘りの部分は他の機会にまた發表させて置くことにする。本論文の主題からいへば、これまでのところは單に序論的部分にすぎないが、トマスに於けるエクシステレの意味の實證的探究としては、これだけでまゝな意味を有すると思われぬからである。然しながらこれだけで終了するのは、本論文の主題全體に對する所説を望まれる讀者諸賢に對して不忠實のせしりをまぬがれぬ故、殘された諸問題に對する我々の解答の要約を以下に述べて置く。たゞし紙数の都合上、トマスの本文からの引證は省き、たゞ重要箇所に對する簡單な指示だけにとゞめる。引證にもとづく詳細な議論の展開は、後日にゆづらなければならぬ。

第一。トマスに於けるエッセンチアに對する意味でのエッセは、エクシステレと置換えらるべきでないことの實證。——エクシステレとの關係に於て、トマスのエッセは次の三つの群に一應分類することができる。(一)「がある」存在表示のエクシステレと等置され得るエッセ。たとえば「實在界にエクシステレする」〔in rebus natura existere〕というかわりに「實在界にエッセする」〔in rebus natura esse〕という。かゝる例は無數である。また「生きる」

「知解する」に對して「存在する」はたらしきを示すエッセ(第三章註(二)に於ける引例参照)。また「概念的」(secundum rationem)に對立して「存在的」(secundum esse)といわれる場合のエッセ。これらのエッセはエクシステレないしエクシステンチアと等置して差支えない。(二)エクシステレと同義と解することも可能である、エッセ。これは我々がさきに「第二章・哲研四三五號」、エッセンチアに對立するエッセがエクシステレと同じ意味であることを實證する箇所として列擧した五つの箇所に於けるエッセをその代表的例とする。これらの箇所からして我々は、エッセンチアはエッセによつてエクシステレする、ことを明確に理解する。故に「白いものは白さによつて、白い」とう命題との類比をそのまま採用すれば、さきの命題は、「存在するものは存在にによつて存在する」ということになり、存在することの形相因たるエッセはエクシステレと同義的であると解することも可能である。然しかゝる解釋に對しては疑問の餘地があり、それらの疑問については既に述べられた「第二章・哲研四三五號・第三五章・本號」に、これらの箇所に於けるエッセはエクシステレの意味にも解することが可能であるというだけのことであつて、そう解さねばならぬ絶對的理由はない。(三)エクシステレと絶對に區別されねばならぬエッセ。これにはいくつかの場合があげられ得るがその主なるもの若干をあげると、(a)神のエッセはそのエッセンチアであるといわれる場合のエッセは絶對にエクシステレではない。(b)生物にとつてはその生きることがそのものエッセである(vivere est esse viventis)といわれる場合のエッセは絶對にエクシステレではない。(c)人間知性のエッセは肉體と知性との合成體たる具體的人間のエッセと同じエッセであり、知性は肉體との結合に於て自らのエッセを肉體につたえる(communicare esse)のであるといわれる場合のエッセは絶對にエクシステレではない。(d)キリストのエッセは神のエッセであり、キリストに於て神性と人性とが結合する場合、神性のエッセがその人性につたえられるのであるといわれる場合のエッセは絶對にエクシステレではない。しかも第二群に於けるエッセンチアに對する意味でのエッセも、實はこの第三群に屬するものとして理解さるべきものである。

(1) (a) エクシステレと絶対に區別さるべきエッセの實例。——(a) 神のエッセとエクシステレ。——神の存在「エクシステレ」を我々は知ることができる「神存在論證の可能性」。神の本質(エッセンチア)を我々は知ることができない「神本質の不可知性」。神のエッセンチアはエッセそのものである「神に於けるエッセとエッセンチアとの同一性」。以上三つはトマス全哲學體系を支える三つの根本命題である。ところでもしもエッセとエクシステレとが同じことであるとすれば、上記の三命題は兩立しないことになる。なぜならば、もしエッセがエクシステレであるとすれば、神の存在(エクシステレ)は知られ得る「第一命題」のであるから、従つて神のエッセも知られ得ることになる。ところがエッセはエッセンチアである「第三命題」から、従つて神のエッセンチアは知られ得ることになる。これは神のエッセンチアは知られないという第二命題に反する。——またもし逆に、この命題をみとめ、そこから出發すると、今度は神の存在論證可能性の第一命題が成立しないことになる。すなわち、神のエッセンチアは不可知である「第二命題」。然るに神のエッセはエッセンチアである「第三命題」。故にもしもエッセがエクシステレであるとすれば、神の存在(エクシステレ)も不可知であることになる。これは神の存在論證可能性の第一命題に反する。——これはトマスが能力論第七論題二項に於て、神のエッセはエッセンチアであるかどうかという問題を提起した時、エッセンチアとエッセとは同じでないことを立證する有力な異論の論據として提出したものであつて、この論據とそれに対するトマスの解答とは、トマスのエッセとエクシステレとを混同することがいかに重大な誤謬であるかといふことを我々に知らしめるであらう。その意味でこゝはきわめて重大な箇所であるから、筆をいとわずその異論の全文をかゝけておく。De pot. q. 7, a. 2, ob. 1. Dicit enim Damascenus: . . . Quoniam quidem Deus est, manifestum est nobis; quid vero sit secundum substantiam et naturam, incomprehensibile est omnino et ignotum. Non autem potest esse idem notum et ignotum. Ergo non est idem esse Dei et substantia vel essentia eius. 神「がある」といふことは我々に明である。然しその本質が何であるかは全然知られない「ダマスケナス」。然るに知られるものと知られぬものとが同じであることはありえぬ。故に神はエッセンチアとは同じものではない。神學大全第一部三論題四項にも同じ異論が提示されて居る。I. q. 3, a. 2, ob. 2. De Deo scire possumus an sit, ut supra dictum est. Non autem possumus scire quid sit. Ergo non est idem esse Dei, et quod quid est eius, sive quidditas vel natura.

(b) 生きることは生きるもののエッセであるといわれる場合。——トマスはしばしば右を「存在するもの」「生けるもの」「知解するもの」の類に區分し、それぞれ「esse, vivere, intelligere」を固有のはたらきとして歸屬せしめる。このように「生きる」「知解する」に對立的に區別されるものとして解されたエッセはエクシステレといへることが出来る。「第三四

聖トマスに於ける esse と existere にひいて (完)

章註(二)の例参照]。ところが或場合トトマスはまた、生きることは生けるものにとつてのエッセであるという。II Sent. d. 17. q. 1. a. 2. ad 5. *vivere nihil aliud est quam esse viventium.* の場合のエッセは明に「生きる」ことに對立的に區分された「存在する」意味でのエッセではなくて、生きることと存在することとを自らのうちに包含し、生物がそれによつて(quo)現實的に生物である「はたらしきを管理する生物の現實性としてのエッセである。かゝるエッセはエクシステレではなく、むしろ生物のエッセンチアに對する *actus essendi* としてのエッセとして環解されるべきである。

(c) 人間知性のエクシステレ——人間知性はそれ自らのエッセを有する。知性は肉體と結合することによつて具體的人間ができるが、その人間「合成體」のエッセと知性「形相」のエッセはことなるものではなく、兩者は全く同一のエッセである。この事態を説明する爲に、トマスは知性は肉體と結合する限りに於て自らのエッセを肉體につたえる(*communicare*)のであるという。故に人間が死ぬということは知性そのもののエッセが失われることを意味せず、肉體が知性からはなれることによつて肉體が知性のエッセを、從つてまた人間のエッセを失うことに外ならぬ。故に知性は死後も自らのエッセによつて存在するのである。以上はトマスの靈魂不死説である[本論文第七章註(五)・哲研四三七號參照]。——ところで今このエッセをエクシステレと同一であるとしよう。すると肉體と結びついた知性、すなわち現世に生存して居る個々の具體的人間のエッセと、肉體から離れた知性、すなわち死後の靈魂のエッセとは同じであるから、もしエッセがエクシステレであるとすれば、現世的人間と死後の靈魂とは同じ仕方でもエクシステレすることにならう。然しこれは事實に反する。なぜならば現世に生存する人間はその身體によつて時間空間的に存在(エクシステレ)するが、靈魂はたゞ存在するとしてもかゝる時間空間的な存在ではないからである。故に現世的に生存する人間と死後の靈魂とはエッセは同じでもエクシステレはことなるといわねばならぬ。

(d) キリストのエッセとエクシステレ。——キリストに於ては神性と人性とが結合して居る。故にキリストは眞の人であるとともにまたその神性によつてまことの神である。然し神性と人性との結合體としてのキリストのエッセは神のエッセそのものである。キリストの有する神性は人性との結合に於て、その神性のエッセをその人性につたえ、かくて人性そのものを、それはあくまで人間としての性質を保持しつつ、しかも神的なものにして居るのである。故にもしエッセがエクシステレと同じであるとすれば、キリストは神が存在すると同じ仕方でも存在する筈である。然しこれは事實に反する。なぜならば神の存在は永遠的であるに對して、キリストは人間として時間的歴史的存在だからである。故にキリストと神とは、そのエッセは同じでもそのエクシステレはことなるといわねばならぬ。キリストのエッセについては神學大全第三部一七論題二項、キリストの

うちには唯一つのエッセンスがあるか (Utrum in Christo sit tantum unum esse) に於て論ぜられる。——このように同一のエッセンスからどうしてことなるエッセンスが生ずるかにについては後に説明される。

第二。トマスに於けるエッセンチアに對するエッセはいかに解すべきか。それは「ある」の現實態 (actus essendi) として理解されるべきである。——この解答はトマス自身の本文にもとづく。すなわちトマスは、神のエッセンチアがエッセであるといわれる場合のこのエッセの意味は、存在ではなくて「ある」の現實態ととるべきであるといつて居る。<sup>(10)</sup>「ある」の現實態とは何か。それはそれにもとづいて (onb) 何らかのものが現實的に「ある」ものとなる形相的なものである。こゝで「ある」とは、單にもの「がある」「存在する」というだけのことではない。何らかのものが現實に「ある」とは、單に現實的に存在するというだけのことでなく、現實的に何か「である」ものが現實的に「存在する」ことに外ならぬ。故に現實的に「ある」とは、何らかのもの「で現實にあるものが現實にある」ことであつて、「がある」と「である」とのもとなる「ある」というまさにそのことが現實的になることを意味する。エッセが「ある」の現實であるに對し「ある」の可能性として關係するのはエッセンチアそれ自體である。エッセンチアそれ自體とは、それがいかなるエッセによつて現實化されて居るかを顧慮することなく、すべてのエッセから切り離してエッセンチアである限りに於けるエッセンチアとして措定されたエッセンチアであつて、たと事物の「何か」を規定するものであり、トマスによつて「絶對的に考察された本質」(essentia absolute considerata) といわれる。<sup>(11)</sup>このエッセンチアそのものは、その現實態としてのエッセから獨立に考察される限りに於ては、いかなる意味での「ある」の現實性をも持たないから、それは單に、現實にはそのようなもの「がない」「存在しない」という意味で現實的に「ない」のみならず、現實的に何もの「でもない」という意味に於ても現實的に「ない」。それにもかゝわらず、それはエッセを受けることによつて、單に現實的に「がある」「存在する」ものとなり得るものであるといふ意味に於て「ある」ことに對する可能性であるのみならず、なおまた現實的にそのもの「である」ものとなり得るも

のであるという意味に於ても「ある」の可能性である。すなわちエッセンチアそのものは、現實的には「がある」意味に於ても「である」意味に於ても「あらざる」ものでありながら、しかもエッセを受取ることによつて「がある」意味に於ても「である」意味に於ても「あり得る」ものとして、端的に「ある」の可能性である。従つてエッセとエッセンチアとの區別を、「である」存在と「がある」存在との區別として説明しようとする解釋は、少くともトマスの解釋としては、廢棄さるべきである<sup>(四)</sup>。エッセとエッセンチアとの實在的區別ということも、兩者を「ある」ことに關係する現實——可能關係として把握することによつてのみ正當に理解され得るであらう。もし兩者を「がある」存在と「である」存在との區別として解するとすれば、兩者の區別は必然的に概念的區別となるであらう。——またエッセとエッセンチアとの現實——可能關係は、形相と質料との現實——可能關係と同一視されてはならぬ。形相——質料という關係は二様の意味でとられる。そしてこのいづれの意味に従つても形相——質料關係はエッセエッセンチア關係と同一ではない。形相——質料關係の二義性は、質料の二義性にもとづく。すなわち質料は或場合には「指定された質料」(materialia signata)の意味にとられ、或場合には質料一般の意味にとられる。指定された質料とは、こゝに存在して居るこの個物の質料として三次元のうちに具體的に指定され得る質料であり、これに對してはかゝる指定された質料を現實的にこの個物たらしめて居る形相として、いわば指定された形相ともいうべきものが對應する。指定された質料と形相との間には或可能——現實關係が成立つが、かゝる質料は完全な意味での可能性ではない。なぜならばそれは形相に對して可能的なものとして可能態にあるが、しかも可能態に於て存在して居るものとして、既に「存在」の現實性を前提して居るからである。——もう一つの意味で質料は、かかる指定された質料から抽象された質料一般の意味にとられる。かゝる質料に對しては、同じく指定された形相から抽象された形相一般が對立する。「たとえばこの個人的人間はこの肉體「質料」とこの魂「形相」とから合成されて居る、というのは前の形相——質料關係の場合であり、これに對し、一般的人間は肉體と魂とから合成されたものである、というのは後の場合である」。かゝる質料一般は形相一般に對して可能——現實



關係にあるが、かゝる意味での質料と形相とから合成されるのは具體的個物として存在する合成體ではなくて、質料と形相とから成るものの本質一般に外ならぬ。然しかゝる合成されたものの本質一般は、既に述べられたように絶對的に考察された本質であつて、そのもの自體そのエッセに對しては可能態としてある。故にかゝる第二の意味での質料—形相關係は、エッセンチア内部に於ける構成要素同志の可能—現實關係であつて、完全な意味に於ける可能—現實關係ではない。これに對しエッセとエッセンチアとの間には完全な意味での現實—可能關係が成立つ。なぜならばエッセは「ある」ものを最も完全な意味で「すなわち」である「も」がある「も」含めた意味で「現實的に」ありしめる形相的原理であり、これに對しエッセンチアは最も完全な意味で「すなわち單に」がある「こと」に對してのみならず「ある」ことと對しても「可能的なるもの」として、最も徹底した意味での可能的原理だからである。このようにエッセが「ある」の現實態であるということの意味は、エッセに對して完全な意味で可能性として關係するエッセンチアとの對比に於て、始めて明らかになる。

(三) 註(一)の(a)項に引用した異論に對して、トマスはエッセに二つの意味があり、神に於けるエッセがエッセンチアと同じであるといふ場合のエッセは *actus essendi* としてのエッセであり、神のエッセ「存在」が知られるといふ場合のエッセは「神はある」といふ命題の真理を構成するエッセであるといふ解答をまたたけ居る。De pot. q. 7, a. 2 ad 1. ens et esse dicitur dupliciter, . . . Quandoque enim significat essentiam rei, sive actum essendi; quandoque vero significat veritatem propositionis, etiam in his quae esse non habent: sicut dicimus quod caecitas est, quia verum est hominem esse caecum. Cum ergo dicat Damascenus, quod esse Dei est nobis manifestum, accipitur esse Dei secundo modo, et non primo. Primo enim modo est idem esse Dei quod est substantia: et sicut eius substantia est ignota, ita et esse. Secundo autem modo scimus quoniam Deus est, quoniam hanc propositionem in intellectu nostro concipimus ex effectibus eius. I q. 3, a. 4 ob 2. 註(二)と同く解答が與えられて居る。

(三) 絶對的に考察された本質については「有と本質」第三章參照。我々はこゝでエッセンチアは「ある」の可能性であるといふ可能態とはいわぬ。なぜならば可能態とは可能的狀態をいふ、狀態はかゝる狀態に於てあるものの存在を前提する。然るに

聖トマスに於ける esse と existere との區別 (完)

エッセンチアそのものは、存在的な「ある」に對しても可能的であるから、それは可能態といふことはできぬ。然しエッセンチアはもの本體であるから、その意味で可能性という語を用いる。

- (四) エッセとエッセンチアとの區別を「である」存在と「がある」存在との區別と解する人々があるが、かゝる區別は少くともトマスの解釋としては正當でないと思われる。その理由は第一に、「である」存在と「がある」存在との區別からは、兩者が實在的に區別される理由はでてこない。「あるもの」を「である」と「がある」との二要素に分つのは概念上の區別であつて實在的區別ではない。事實エッセとエッセンチアとの區別をエクシステンチアとエッセンチアとの區別として理解した後期スコラ哲學に於ては、兩者の區別は實在的でなくむしろ概念的なものと解せられるようになって行つたのである。エッセとエッセンチアとは現實—可能的關係に立つものとしてのみ兩者の區別は實在的となる。なぜならば現實—可能的區別は實在的なものであるから。〔本論文第一—章註(二)參照・哲研四三七號〕。——第二に、エッセとエッセンチアとが「がある」存在と「である」存在との區別であるとする、なぜ「である」存在の方が「がある」存在に對して可能的なものと解されねばならぬかということが分らない。むしろ逆のようにさえ考えられるではないか。すなわち「がある」存在は單にエクシステレするだけでまだ何であるとも限定されぬものであり、これに對しエッセンチアは「である」存在としてそのもの何「である」かを規定する形相であるとすれば、むしろ「である」存在たるエッセンチアこそは單に「がある」存在たるエクシステンチアに對して現實態にあるといふべきではないか。——然るにトマスに於てエッセが却つてエッセンチアに對して現實的であり形相的であるといわれることは、兩者が決して「である」存在と「がある」存在として區別されるべきものではないといふことの證據である。
- (五) De ente c. 2, n. 6. *Materia non quolibet modo accepta est individuationis principium, sed solum materia signata; et dico materiam signatam quae sub determinatis dimensionibus consideratur.* 指定された質料は個體化個體化の原としての質料である。すなわち或形相を受取ることによつてたゞちにこの具體的個物となる存在的な質料である。然し他方エッセに對するエッセンチアの構成要素としての質料が考えられる。それは個體化個體化の原としての質料ではなくて、本質構成要素としての質料である。
- 第三。エッセとエクシステレとの關係。それは兩者の間にエッセンチアを介入せしめることによつて始めて明になる。その關係は、エッセンチアはエッセを受取ることによつて、エクシステレする、という命題によつて表現される。——エッセンチアはそのエッセンチアに固有なもろものはたらきへの可能性を自らのうちに含んで居る。それらの

はたらきへの可能性は、エッセンチアがその現實性としてのエッセを受取ることによつて現實的となるが、それらははたらきの根本前提として、それなしには他のすべてののはたらきが現實的はたらきとしてあり得ぬような最も基本的はたらきがエクシステレである。たとえば「人間」のエッセンチアはエッセを受取ることによつてはじめて現實的にエクシステレする。「人間」のエッセンチアは人間に固有なもろのはたらきをすべてその可能性として自らのうちに含んで居るが、それらはすべて人間のエッセによつて現實的となる。たとえば「歩く」「食べる」「語る」「笑う」「考える」等々のはたらきは、すべて「人間」のエッセンチアのうちに可能性として含まれて居るが、それらは悉く人間のエッセによつて現實的になる。すなわち人間はそのエッセを受取ることによりそのエッセに於て、現實に「歩き」「食べ」「語り」「笑い」「考える」等々するのである。而して「存在」(エクシステレ)するということは、これらすべてののはたらきの前提として、これらすべてののはたらきのもとにある。すなわち現實に「食べる」のは現實にエクシステレする者であり、現實に「考える」のも現實にエクシステレする者である。このようにすべての現實的はたらきの根底には現實的エクシステレがあるのである。このようにすべてののはたらき方は多様だがエクシステレすることはすべての現實的にはたらくものに共通である。而して現實的なるものはすべてそのエッセによりまたエッセに於て現實的であるから、エクシステレはエッセンチアがエッセを受取る結果として現成する第一のはたらきである。故にエッセするもの(すなわち現實的に「あるもの」(エンス))は必ずエクシステレする、という命題は正しい。然しエッセはエクシステレである、という命題は正しくない。なぜならそこには原因と結果との混同がみとめられるからである。<sup>(六)</sup>——ところでエクシステレはエッセンチアとエッセとの結合「から出てくる」(エクシステレする)はたらきである。従つてたといエッセンチアは同一であつても、それが受取るエッセが異れば當然そのエクシステレの仕方は異ると考えられる。<sup>(七)</sup>また逆に、たといエッセは同じであつても、それが受取られるエッセンチアが異れば當然そのエクシステレの仕方は異ると考えられる。<sup>(八)</sup>而していかなるエッセにも入り得るが、しかもそれ自體はいかなるエッセから

も超越したものととして、いかなるエッセからも切り離して獨立的に措定されたエッセンチアが絶對的に考察されたエッセンチアに外ならぬ。<sup>(九)(10)</sup>

(六) すべてののはたらきの根底にはエクシステレするものがなければならぬということを、トマスは諸所に「はたらきはエクシステレするもの」[存在者]に固有であるという命題、ないしそれに類する命題によつていゝあらわして居る。I. q. 77, a. 2. ob. 3. Operari est existentis in actu. II Sent. d. 19, q. 1, a. 1. Cum enim operatio non possit esse nisi per se existentis. このようにトマスはオペラーリするものはエクシステレするものでなければならぬことを諸所に於ていつて居る。然しエクシステレそのものがはたらきであることはどこでもいつて居ないようである。故にエクシステレを「はたらき」と解するのは我々の解釋である。このように解することによつてトマスに於ける種々なる問題が見合よく解けると我々は考へるのである。然しエクシステレがはたらきであるといつても他のもののはたらきがそういわれると同じ意味でいわれるかどうか。いかなる意味でエクシステレははたらきであるかについては何もつと詳細な論議を必要とするであらう。

(七) エッセンチアは同じでもそれが受取るエッセが異ればエクシステレの仕方とはことなつてくる。——たとえば馬のエッセンチアは、實在的エッセ (esse reale) を受け、實在的エッセに於て現實化される限りに於て實在的個的馬としてエクシステレする。これすなわち馬が實在的にエクシステレする (in re existere) ことに外ならぬ。然し人間知性によつて抽象され人間知性のエッセ (esse intellectuale humanum) に於て現實化されて居る限りに於ては、人間知性のうちに馬の概念 (conceptus equi) としてエクシステレする。これ馬が人間知性のうちにエクシステレする (in intellectu humano existere) ことに外ならぬ。またすべてのものは神のうちに既に理解されて居るから、馬が神の精神のうちに神のエッセによつて現實的にある限りに於ては神に於ける馬のイデアとして神の精神のうちにエクシステレする (in mente divina existere) 而してすべての事物はまづそれ自體として存在する以前に既に神のうちに神のイデアとして存在して居るから、その意味で神の精神のうちに先在する (in mente divina praexistere) という表現がしばしば用いられるのである。また事物の形相は天使の知性のうちに受取られ天使的知性のエッセによつて現實化されて居る限りに於ては天使の知性に於てエクシステレする。II Sent. d. 3, q. 3, a. 3. Formae autem quae sunt in mente angeli, sunt simillimae rationibus idealibus in mente divina existentibus, sicut deductae, immediate exemplariter ab eis individuantibus sicut rationes vel ideae rerum existentis in mente divina.

(八) エッセは同じでもそれを受取るエッセンチア「ないしそれにあたるもの」がこととなると、存在仕方(modus existendi)はことなつてくる。——たとえば人間知性のエッセと、知性及び肉體の合成體としての具體的人間のエッセとは同じである。然しエッセンチアは異なる。前者に於てはエッセンチアは知性という形相であり、後者に於ては知性的形相と肉體的質料との複合としての合成的本質である。故に肉體から分離した知性がそのエッセによつてエクシステレする場合には、單純形相の存在仕方に類似するところの、超時間的空間的なエクシステレ仕方をするが、肉體と結合して居る限りに於ては、その本質のうちに含まれる質料性の故に、時間的空間的存在仕方をもち。しかも兩者のエッセは同じである。このようにエッセは同じでもエッセンチアが異るとその存在仕方(modus existendi)はことなつてくる。これは本論文通記第一。註(一)(c)項の、人間知性のエッセとエクシステレとが異なる理由を説明するであらう。——またキリストは神の子として、そのエッセは神のエッセそのものであるが、キリストに於ては神のエッセンチア(divina natura)と人間のエッセンチア(humana natura)とが結合して、いわばこの二つのエッセンチアから成るところの全く独自のキリストのエッセンチア「もしそれをエッセンチアと呼んでよいならば」を形成して居るから、このキリストのエッセンチアは神と全く同一のエッセを受けても、そのエクシステレの仕方は、そのキリスト独自のエッセンチアのうちに含まれる人間性の側からの限定をうけて神そのもののエクシステレとは全然ことなるところの人間的な歴史的なエクシステレ仕方「誕生・諸事業・死」をとることになる。このようにエクシステレは、エッセンチアとエッセとの結合から結果するものであり、従つてエクシステレ仕方は單に一方のみならずエッセとエッセンチアとの兩側面から規定されると解することによつて、キリストに於けるエッセとエクシステレとの關係も理解される。「本論文通記、第一。註(一)(d)項のキリストのエッセとエクシステレ参照」。

(九) エッセンチアはアリストテレスのウシア(ousia)のラテン譯である。それはアリストテレスに於ては或場合には實在する個體的質體を示し、また或場合には事物の何たるかを規定する普遍的本質を示し、こゝから第一質體と第二質體との區別が生じた(Aristoteles, Categoriae, c. 5)。トマスに於てウシアはエッセンチアとサブスタンチアという二語に譯される。而してウシアの有する普遍的側面はエッセンチアという名稱により、またその有する個體的側面はサブスタンチアという名稱でもつて示されて居るようである。然しサブスタンチアが全然エッセンチアと同義に用いられることもあり、逆にエッセンチアが個物のエッセンチアとして個體的質體としてのサブスタンチアの意味で用いられる場合もある。このようにトマスに於てエッセンチアという語の用法は多義的あいまいのように見えるが、この多義性は、それぞれの文の脈絡に於て、エッセンチアがいかなるエッセに於てあるものとしてとらえられて居るかという點に注目すれば、比較的容易に理解されるであらう。すなわち實在的エ

ツセに於てあるものとして把握されて居るエッセンチアは實在するエッセンチアとして個別的實體に外ならず、また知性のエッセに於てあるものとしてのエッセンチアは普遍的概念として把握されたエッセンチアに外ならぬ。而してこれらのエッセから完全な抽象された純粹普遍的可知的本性その自體としてのエッセンチアが、「絶対的に考察された本質」である。

(一〇) 以上の如くに、エッセンチアがエッセを受けることによつてエクスステレする、という命題からして、我々がさきにトマスの本文にあつて見出した存在表示のエクスステレの用例はすべて説明がつく。すなわち(1)實在的にエクスステレする(in re existere)とは、エッセンチアが實在的エッセ(esse reale)という現實性に於てエクスステレすること以外ならぬ。(2)知性に於てエクスステレする(in intellectu existere)とは、知性的エッセに於てエクスステレすることである。その場合その知性が、神の知性か天使の知性か人間の知性に應じて同一のエッセンチアは、神の知性のエッセ(esse divinum)、天使的知性のエッセ(esse intellectuale angelicum)、人間知性のエッセ(esse intellectuale humanum)に於てエクスミスチアする。これらの知性的エッセはそこに於てエッセンチアがエクスステレする現實性の場合と考えられる。(3)自存する(subsistere)とは「實體的エッセ(esse substantiale)に於て實體的エッセンチアがエクスステレすることであり、(4)他者に於てエクスシテする(in alio existere)とは、附帶的エッセンチアが附帶的エッセ(esse accidentale)に於てエクスステレすることである。——と云ふで問題となるのは次の二つの場合である。第一、現實的にエクスステレする(in actu existere)と云ふことはよいとして、「可能態に於てエクスミスチアする」(in potentia existere)と云ふことはどのように解すべきか。——これに對して次のように答える。可能態に於てエクスミスチアするとは、何らかのエッセンチアが可能的エッセ(esse potentiale)に於てエクスミスチアすることである、と。然しこれに對してはたゞちに反問が生ずるのである。エッセとは現實態である。故に可能的エッセといふことは形容矛盾ではないかと。これに對して答える。なるほど「可能態にある」ことは「現實態にある」ことに對しては對立する。然し「可能態にあるもの」それ自身について考へて見れば、可能態にあるものについては「可能態にある」というまことにそのものがそのもの現實的あり方である。このかうに考へるならば、可能態に於てあるという一つの現實的あり方がそれに於て現實化するときの esse potentiale を指定することは必ずしも形容矛盾ではない。尤もトマスのチキストのうちには esse potentiale という用例はない。故に以上は自分の解釋として大方の批判をおおぎたいと思う。然し potentia esse が actu esse に對して用ゐられて居る箇所はある。De princ. naturae n. 1. Quoniam autem quoddam esse potest licet non sit, quoddam vero est: illud quod potest esse dicitur potentia esse, illud autem quod jam est dicitur esse actu. 其他トマスに於ては質料的エッセ(esse materiale)意向的エッセ(esse intentionale)靈的エッセ

(*esse spirituale*) 恩寵的エッセ (*esse gratiae*) 等々の表現が見出されるが、これらのエッセは、エッセンチアがそれを受けることによつて、ないしはそのエッセに入ることによつて、そのエッセに従つて現實的にエクシステルするいわば現實性の場、ないし境地の意味に解することができよう。——第二の疑問は次の如くである。エッセンチアを持たぬものについてエクシステルするといわれる場合、たとえば眞理が知性のうちにエクシステルするとか盲目が眼のうちにエクシステルするとかいうこととはどのように解するか。これに對しては次のように答える。この場合にはエッセツチアということとをさきにも述べたやうに【第三章註(一〇)参照】廣く一般に何らかの規定性と解する。すると眞理が知性のうちにエクシステルすることは、眞理のラチオが知性的エッセに於てエクシステルすることになる。盲目についても同じで、眼のうちにエクシステルするのは盲目という「もの」ではなくてラチオであることになる。ラチオとエッセンチアとの關係及び區別については更に詳細な考察を要するであらう。——要するに何らかの規定性としてのエッセンチアないしラチオが、何らかの現實性の場としてのエッセに於て現實化することが、エクシステレである、ということとは、「がある」存在表示のすべてのエクシステレの用法についていへ得ると思われれる。

第四、エッセとエッセンチアとの區別をエクシステンチアないしエクシステレとエッセとの區別として理解したトマス以後のスコラ哲學ならびにジルソンの解釋はいかなる理由で生じたまたそれはいかなる意義を有するか。——これに對しては、初期のトミスたちの解釋と、後期のいわゆるスコラ哲學者たちの解釋と、ジルソンの解釋とは、別個に考察されねばならない。初期のトミスたちは、トマスのエッセのうちに含まれる存在的性格を強調した。トマス以前にトマスほどエッセということとを存在の次元から取り扱つた人はなかつた〔ただしアウグスチヌスは別である〕。トマス哲學の解明を意圖する初期のトミスたちは、そのエッセが單に何「である」かのエッセ、すなわち本質を示すエッセではなくて、存在の根底から把握されたエッセであることに特に注意を喚起する爲に、このエッセを「現實存在のエッセ」(*esse actualis existentiae*) と「べきものエッセ」(*esse quidditativum*) から區別せねばならなかつた。然し彼らはトマスに於けるエッセとエッセンチアとの對立はこれをそのままに保ち、エクシステンチアとエッセンチアとの對立の問題にすりかえることはなかつたのである。このように、トマスのエッセの最も重大な性格と

しての存在性を注意するという點に、初期のトミストたちがエッセをエクシステンチアと説明した理由が存するのであつて、この限りに於て彼等の解釋は容認さるべきである。<sup>(110)</sup>——いわゆる後期のスコラ哲學者たちに於ては、エッセとエッセンチアとの區別は、存在の現實と可能性との問題ではなくて、單に有の概念的分析の問題にすぎなくなる。有はいかにして現成するかという問題——それはトマスに於ける根本問題であり、その説明は結局に於て、無からの創造というキリスト敎神學思想に歸着する——は、有はいかなる概念的要素に分解されるかというスコラの存在論的概念分析の問題に墮する。かゝる問題提起の基盤に於て有は無際限に概念的に區分され、ついに「不必要に有の數をますべからず」というオッカムの警告を受けるに到る。然しながらかゝる有の概念的區別のこゝろみは全然無意味であつたわけではない。かゝるこゝろみは、たといエッセそのものについての探究を忘却したにしても、エンス〔有〕に關する比類なく整備した存在論の體系を生み出し、その體系はそこから近代哲學的並びに科學的思惟という方法とがたといそれに意識的には反抗しつゝも胎生する基盤を形成するからである。<sup>(111)</sup>——シルソンの使命は、かゝる概念化されたスコラ哲學に於て停滞したトマス解釋と、かゝる解釋を通して歪められたトマス哲學そのものに對する誤解とを一掃し、トマスのエッセそのものの意味を解明することである。そこでシルソンのトマス解釋に於ける仕事は二つとなる。一つは、ギリシヤ以後の存在論の歴史のなかにトマス哲學を正しく位置づけることである。すなわちトマス哲學は單なるアリストテレス哲學の模倣ではなく、そこにはエッセそのものの把握に關する新しい發展のあることを實證する。そしてこのことを示す爲にシルソンはトマス存在論を *ontologie existentielle* と名づけることによつてアリストテレスの *ontologie substantielle* から區別する。もう一つの仕事は、スコラ的概念的なエッセの把握に反對して、トマスのエッセの有する現實的活動的性格を明にすることである。かゝる意圖は、彼がエッセを説明するのに在來のエクシステンチア (*existentia*) という語をさけて *l'acte d'exister* という語を用いることのように如實にあらわれて居る。<sup>(112)</sup> この限りに於て我々はシルソンがエクシステレを強調する趣旨を全面的に認



める。にもかゝらずエッセとエクシステレとはどこまでも區別されねばならぬと主張するのである。——とところで我れにとつてなお残されて居るのは次の問題である。すなわちエッセはたしかにトマス哲學の根本であるが、エッセそのものの何たるかの説明はトマスに於て十分であるといふがたい。それを現實(actus)として把握した點にトマスの獨創があると思われるが、では現實とは何であるか。現實は單なる言葉ではなく、それが我々にとつて現實的となつた時、はじめて眞の意味で現實である。神を純粹現實たるエッセそのものとして把握し、エッセそのものなる神のたえざる現實的觀想のうちに思索したトマス自身にとつては、エッセそのものが一つの現實的事實であり、そこから出發すべき發端として、ことさらにその現實性を問題とする必要をみとめなかつたということを我々も容認しよう。然しトマスにとつて現實的であつたといふことは、決して我々にとつてもまた同様に現實的であることを意味しない。むしろ我々は、現實とは何か、を問わねばならぬような現實的状況におかれて居るといわれ得るであらう。かゝる狀況の自覺のもとに於てのみ、トマスのエッセの現實性についての歴史的研究は、我々にとつて現實的意義を有し得るであらう。

(完)

(一) アウグスチヌスに於てエッセといふことはもつぱら「がある」存在の意味の側面から把握されて居る。このことは彼の初期の對話篇、ことにソロキアなどに於て用いられるエッセの意味を理解する上に重要である。従つてまたアウグスチヌスに於てはエッセセンテアという語は、アリストテレスやトマスに於ける如く事物の「何か」を規定する本質ないし何性という意味ではなくて「存在するもの」つまり「存在者」の意味に用いられて居る。ではアリストテレス・トマスに於ける本質ないし何性にあたるものは何かといふに、アウグスチヌスに於てはかゝる意味での本質は殆んど問題にならなかつたのではないかと思われる。エッセといふことを何「である」のエッセとして、その面から探察することはトマスがアリストテレス・ボエチウスを通して繼承したギリシヤ的傳統であり、エッセをエクシステレの側面から考察することは、トマスがアウグスチヌスを通して創世記から繼承したイスラエルの傳統である。トマスの獨創はエッセを現實・エッセセンテアの可能として把握することによつて、エッセの問題を「である」でも「がある」でもなくまさに「ある」の現實・可能の問題とし、かくしてギリシヤ的存在論とイスラエルの存在論の可能性とを綜合した點にある。アウグスチヌスはこれまで神學的思想的の方面に於てのみトマスに

影響をあたえ、存在論の領域に於てはアリストテレスが全面的にトマスに受容されたと考えられてきたが、存在論の面に於てもアウグスティヌスのトマスにあたえた影響の決定的であることは大いに注目すべきことであると思われる。我々はさきに或場所に於て（日本哲學會・昭和二十七年春季大會・東京大學）「聖アウグスティヌスに於けるエッセとエッセンチアについて」という題でこの問題に關して述べたが、その詳細な論究は後の機會にゆずる。

(一二) こゝで初期のトミストというのは、必ずしもトマスの同時代の、あるいは死直後のトミストに局限されるのではなくて、トマス解釋としてその正當性のみとめとめられて居るカエターヌスの如きをもその代表著として我々は擧げる。カエターヌスのエッセ解釋については本論文第二章註(三)及び(二五)参照。哲研四三五號。

(一三) デカルト哲學は、かゝる見地から考察されるとき、興味深い歴史的意義を有する。すなわち彼に於て近代科學的思惟とスコラ哲學的思惟とは混在して居る。在來の哲學史家は、デカルトのうちに近代哲學の先驅者ないし解折幾何學の創始者のみを見て、その哲學の有するスコラ哲學的側面を無視し、あるいはそれを認めざるを得ない場合には、これをデカルトの保守的側面として唾棄し輕蔑した。然しこの二つの思惟はデカルトに於て二つの矛盾する傾向として無關係に並存するのでなくて、むしろデカルト的思惟の一つの根原的エッセから出る（たとえば明晰判明を尊ぶ精神は、どこまでも概念の明晰性を追つて概念を分析して行くスコラ的思惟と共通の源から出る）。故にこの一つのいわばデカルトのエッセからデカルトを見ぬならば、そのデカルト觀は抽象的となるであらう。ジルソンはデカルト哲學のなう中世的スコラの傳統を歴史的に解明した點に於て不滅の業績をのこしたが、然し單にデカルトはこれこれの思想を過去から受けて居るということを示すだけでは、これまで表から見られて居たデカルトを裏から見直したというだけのことで、眞にデカルトそのものを明にしたことにはならぬ。デカルトを二つの思惟の根原としてのデカルトのエッセから見直すことは、今後の課題であらう。

(一四) *Gilson, Le Thomisme 特し第七章、トマスムの精神 (L'esprit du thomisme) p. 497ff.* 参照。

(一五) エッセはいかにして我々に於て現實的となるか。——この問いを現代に於て正面から問題にしたのはハイデッガーである。時間はザインがそれに於て我々に於て現實的となる地平としてとり上げられて居る。ザインの探究はザインの現實性そのものを問うといふこゝろみによつて、ハイデッガーに於てたしかにトマスよりも一步をすすめた。と同時にそれはフィロソフイア・ペレニスの正しい繼承といわれ得る。ハイデッガーをば、それが好んで取上げる不安とか絶望とかの概念の故に、單に氣分的主觀的哲學者と解するのはきわめて淺薄な誤解である。ハイデッガーの眞の意圖は、彼をフィロソフイア・ペレニスの現代的尖端に於てはたらしきつゝある人と見ることによつてのみ正當に理解され得るであらう。

（筆者）大阪市立大學文學部「哲學」助教

以下にかかげるのは、本論文に引用ないし言及されたものであつて、たゞい本論文を複製する爲に参照されたものであるが、つゞも引用ないし言及されなかつたものは一切含まない。一、チキストと二、其他との二部に分ち、一部には、トマヌチキストの題名の日本語と使用した版名と引用の際の略符(括弧の中)とをづける。たゞしチキストの籤録は二部に入れる。筆者自ら参照せず他書の引用をさのまへ借用した著作は(\*)を附して識別する。なおチキストの題名の日本語は、通常行われて居るものはこれを採用し、それのないものは筆者が便宜上これを附した。

一 チキスト

- 1 神學大全第一巻第二部の一、第二部の二、第三部 Summa theologiae, Pars Prima, Prima secundae, Secunda secundae, Pars tertia, ed. Commissio Plana, 5 Vols. Ottawa, 1941-1945 (I, I-II, II-II, III 略記)
- 2 對異教徒大全 Summa de veritate catholicae fidei contra gentiles, ed. Leonina Manuals, Roma, Marietti, 1934 (Gent.)

3 命題集註解 Scriptum super Libros Sententiarum

Magistri Petri Lombardi Episcopi Parisiensis, ed. MANDONNET, Tomus I, II, Parisiis, 1929. (Sent.)

4 真理論 Quaestiones disputatae de veritate, ed. SPIAZZI,

ZZI, Quaestiones disputatae, Vol I, Marietti, 1949 以下所收。(De verit.)

5 能力論 Quaestiones disputatae de potentia, ed. PESSON. Quaestiones disputatae, Vol II, Marietti, 1949. 以下(8)まで同版以下所收。(De pot.)

9 靈魂論 Quaestio disputata de anima, ed. CALCIOTERRA et CENTI. (De anima)

7 惡論 Quaestiones disputatae de malo, ed. BAZZI et PESSON. (De malo)

8 第一級論 Quaestiones disputatae de virtutibus in communi, ed. BAZZI et PESSON. (De virt. in comm.)

6 國字論題集 Quaestiones quodlibetales, ed. SPIAZZI, Marietti, 1949. (Quaest. quodlib.)

10 神學叢書 Compendium theologiae ad fratrem Reginaldum socium suum carissimum, ed. VERRARD. Opuscula theologica Vol. I, Marietti, 1954 (Compend. theol.)

11 キリヤマン論 駁論 Contra errores Graecorum ad Urbanum W Pontificem Maximum. (Cont. err. gr.) (10)と同版。

12 自然のしかべと神のほたけのしるし De operationibus occultis Naturae, Opuscula omnia, ed. MANDONNET, Tomus I, Parisiis, 1927. 以下(12)まで同版。(De op. occ.)

- (nat.)
- 18 分離實論 De substantiis separatis ad Fratrem Rayaldum de Piperno. (De sub. sep.)
- 14 原因論註解 Expositio super Librum de causis. (De causis.)
- 15 自然原論 De principiis naturae ad fratrem Sylvestrum (De princ. Nat.) St. Thomas, Opuscula omnia, ed. PERRIER, Tomus I, Paris, 1949. 所收。
- 16 有之本質 De ente et essentia, 波エテク論證 1955 (De ente.)
- 17 フリントナクノク 形而上學註解 In duodecim Libros Metaphysicorum Aristotelis exposito, ed. САРНАЛА, retract. Spiazzi, Marietti, 1950 (In Met.)
- 18 フリントナクノク 自然學註解 Commentaria in octo libros Physicorum Aristotelis. Opera omnia ed. Leonina Tomus II, Roma, 1884. (In Phys.)
- 19 フリントナクノク 命題論註解 Commentaria in Aristotelis Libros Peri Hermeneias, ed. ZIGLIARA, Omnia ed. Leonina Tomus I, Roma, 1882. (In Periherm.)
- 20 フリントナクノク 分析論發書註解 In Libros Posteriorum Analyticorum Exposito, ed. Leonina (19) 二回版 (In Post. Anal.)
- 21 フリントナクノク 感覺論註解 In Librum De sensu et sensato Commentarium, ed. Spiazzi, Marietti, 1949. (In De sensu.)
- 22 フリントナクノク 記憶論註解 In Librum De memoria et reminiscencia Commentarium, ed. Spiazzi, (21) 二回版。 (In De mem.)
- 23 フリントナクノク 十種論註解 In decem Libros Ethicorum Aristotelis ad Nicomachum Exposito, ed. Spiazzi, Marietti, 1949. (In Eth. Nic.)
- 24 フリントナクノク 政治學註解 In Libros Politicorum Exposito, ed. Spiazzi, Marietti, 1951. (In Polit.)
- 25 フリントナクノク 神學論註解 In Librum Beati Dionysii De divinis nominibus Exposito, ed. CESARI PERA, Marietti, 1950. (In De div. nom.)
- 26 フリントナクノク 神學論註解 Expositio super Boethium De Hebdomadibus, ed. CARATTERA, Opuscula theologica, ed. Spiazzi, Vol. II, Marietti, 1954. (In De Hebd.)
- 27 フリントナクノク 福音論註解 Super Evangelium S. Matthaei Lectura, ed. RAPHAEUS CAI Marietti, 1951. (In Matt.)
- 28 フリントナクノク 福音論註解 Super Evangelium S. Iannis Lectura, ed. RAPHAEUS CAI, Marietti, 1952. (In Ioan.)
- 29 フリントナクノク 聖書論註解 Super Epistolam ad Romanos Lectura. Super Epistolas S. Pauli, ed. RAPHAEUS CAI, Vol. I, Marietti, 1953. (In Ad Rom.)
- 30 フリントナクノク 聖書論註解 Super Primam Epistolam ad Corinthios Lectura. (In I Cor.) (29) 二回版。

12 ヒトヒトノ書翰論 Super Epistolam ad Ephesios Lectura. Super Epistolas S. Pauli Lectura, ed. RAPHAEUS Vol. II, Marietti, 1953 (In Ad Ephes.) 五十二 (32) (33) の題版。

13 ヒトヒトノ書翰論 Super Epistolam ad Philippenses Lectura. (In Philip.)

14 ヒトヒトノ書翰論 Super Epistolam ad Colossenses Lectura. (In Coloss.)

15 トコトクノク 邏輯學大全 (總論) Summa Totius Logicae Aristotelis. Opuscula omnia, ed. MANDONNET, Vol. V. Paris, 1927.

三 論 他

16 ARISTOTELIS, Categoriae, ed. L. MINIO-PALUZZI, Oxonii, 1949.

17 ARISTOTELIS Prior and Posterior Analytics. A Revised Text with Introduction and Commentary by W. Doss. Oxford, 1949.

18 ARISTOTLE, Analytica Posteriora, translated by G. R. G. MURE (The Works of Aristotle, Translated into English under the Editorship of W. D. Ross. Vol. I, Oxford, 1928 論部)。

19 ARISTOTLE, Les seconds analytiques, Traduction nouvelle et notes par). TRICOTY, Paris, 1938.

20 ARISTOTELIS, Lehre vom Beweis (Des Organons vierter Teil) oder Zweite Analytik, Neu übersetzt von Eug. ROLES, Leipzig, 1922.

21 ARISTOTELIS Metaphysics. A Revised Text with Introduction and Commentary, by W. D. Ross, 2 vols. Oxford, 1924.

22 トコトクノク 形而上學ノ學論總論ノ附編 11年。 ARISTOTELIS Physics. A revised Text with Introduction and Commentary by W. D. Ross, Oxford, 1936.

\* 23 AUGUSTINUS, De Civitate Dei, PL 41.

\* 24 AUGUSTINUS, De Trinitate, PL 42.

\* 25 BOETIUS, Liber de Persona et duabus Naturis contra Eutychen et Nestorium ad Iohannem Diaconum. Ecclesiae Romanae, PL 64.

\* 26 BOETIUS, De Hebdomadibus (Quomodo Substantiae, in eo quod sint, ipsae sint, cum non sint Substantia Bona, Liber ad Iohannem Diaconum Ecclesiae Romanae, PL 64.

\* 27 BOETIUS, De Trinitate (Quomodo Trinitas unus ac non tres Dei), PL 64.

28 CAETERANUS, Commentaria in "De Ente et Essentia", ed. MICHAEL, Romae, 1907.

29 CAETERANUS, Commentaria in Primam Partem Summae theologiae, ed. Leonina, Tomus IV, Romae, 1888.

- 25 CHENU, Introduction à l'étude de Saint Thomas d'Aquin, Montréal, 1950.  
 15 DEFRERRARI, A Lexicon of St. Thomas Aquinas based on the Summa Theologica and selected passages of his other works, Washington, 1948.  
 \* 23 DAMASCENUS, Expositio Accurata fidei Orthodoxae, PG. 94.  
 \* 22 Ps. DIONYSIUS AREOPAGITA, De Divinis Nominibus, PG. 3.  
 27 FINANCE, Joseph de, Etre et Agir dans la philosophie de St. Thomas, Paris, 1945.  
 25 GILSON, E, L'être et l'essence, Problèmes et controverses, Paris, 1948.  
 22 GILSON, E, L'esprit de la philosophie médiévale, 2e éd. Paris, 1944.  
 12 GILSON, E, Le Thomisme, Introduction à la philosophie de St. Thomas d'Aquin, 5e éd. Paris, 1947.  
 22 GILSON, E, Jean Duns Scot, Introduction à ses positions fondamentales, Paris, 1952.  
 22 GREY, J., O. S. B., Elementa Philosophiae Aristotelico-Thomisticae, Vol. II, Barcelona, 1951.  
 22 HEIDEGGER, Sein und Zeit, I Häfte, 4 Aufl. Halle, 1935.  
 12 IOANNES A SANCTO THOMA, O. P., Cursus Philosophicus Thomisticus, Vol. II. Nova editio a P. Beato Reiser, O. S. B. Marietti, Romae, 1933.  
 22 LEWIS & STORR, A Latin Dictionary, Oxford, 1951.  
 22 MENGE-GUTHRIK, Lateinisch deutsches Wörterbuch, Teil I, 4 Aufl. Berlin. 1911.  
 22 Novum Testamentum Graece et Latine, ed. MERR, Roma, 1933.  
 22 QUICHERAT et DAVELUY, Dictionnaire Latin-français, Paris, 1916.  
 \* 22 RICHARDUS DE S. VICTORE, De trinitate, PL 196.  
 12 ROLAND-GOSSELIN, M.-D., Le "De ente et essentia" de St. Thomas d'Aquin, Paris, 1948, La distinction réelle entre l'essence et l'être.  
 22 SCHÜTZ, L., Thomas-Lexikon, Paderborn, 1895, Photolithographischer Nachdruck des Zweiten, sehr vergrößerten Aufl. New York.  
 22 SILVESTER FERRARIENSIS, FRANCISCUS de, Commentaria in "Summa contra gentiles", ed. Leonina, Tomus XIII, Romae, 1918.  
 22 Summa theologiae, translated by Fathers of the English Dominican Province, First Complete American Edition, 3 Vols, New York, 1947.  
 12 Summa theologiae, übersetzt von Dominikanern und Benediktinern Deutschlands und Österreichs, heraus-

- gegeben vom Katholischen Akademikerverband, Salzburg, Band I, II, III. 1933-1839.
- 72 La Somme Théologique de St. Thomas, tr. par M. L'abbé DRUON; Paris, Tome I, II, 1861.
- 73 Somme Théologique, édition de la Revue des jeunnes, Paris, 1925-26 POUGERA 及び SERTILANGE による譯がせられた。
- 74 Contra Gentra Gentiles livre 2e, tr. par M. CORVEZ et De L.-J. MORREAU, P. Lethielleux, 1954.
- 75 The Summa Contra Gentiles of St. Thomas Aquinas, tr. by the English Dominican Fathers, 5 Vols. London, 1923-1929.

## 新着外國雜誌所載論文一覽

一 哲 學 一

- THE JOURNAL OF PHILOSOPHY, 1955 (Vol. LII).
- Varet, Gilbert: Dialogue and Dialectic (A Review of the Conference Held in Athens, May 2-6, 1955, under the Auspices of the International Institute of Philosophy) (No. 20, Sept. 29).
- Pench, Bernard: Analysis and Critierology in Philosophy of Ethics (No. 21, Oct. 13).

- 76 Summa contra gentiles, übersetzt und herausgegeben von KARL AN HERMUT FAHSEI, 4 Bde, Dürig, 1942.
- 77 On the Power of God, tr. by the English Dominican Fathers, 3 Vols. London, 1932-33.
- 78 WUW, M DE, Histoire de la philosophie médiévale, 4e éd. Paris, 1912.
- 79 山田 巖の自傳的 (per se) エッセイの人文研究第四卷五號, 1953.
- 80 山田 巖の能力と意識の人文研究第四卷四號。
- 81 ZIGLIARA, Adnotationes ad S. Thomae Aquinatis Commentaria in Aristotelis librum Posteriorum Analyticorum, ed Leonina Tomus I, Romae, 1882.

Lafleur, Laurence J.: The Transition to Ethics (No. 21, Oct. 13).

[Symposium Papers: To Be Presented at the Fifty-Second Annual Meeting, Boston University, December 27-29, 1955]

Wilson, N. L.: Space, Time and Individuals (No. 22, Oct. 27).

Taylor, Richard: Spatial and Temporal Analogies and the Concept of Identity (No. 22, Oct. 27).

Broudy, Harry S.: How Philosophical Can Philosophy of Education Be? (No. 22, Oct. 27).

Price, Kingsley: Is a Philosophy of Education Necessary? (No. 22, Oct. 27).

Northrop, F. S. C.: Ethical Relativism in the Light of

few instances with high mountains as the background are found, and even some theorists of painting refer to such. As a rule, however, high mountains were painted as the chief object as seen from much nearer distance. We even find cases where the difference of distance is represented as that of height. In the Western World, the demand for height manifested itself rather in the construction of Gothic cathedrals; in landscape paintings the demand for depth is more to be observed. Far Eastern landscape paintings, on the contrary, have shown a remarkably stronger demand for height.

\*On ESSE and EXISTERE  
in Saint Thomas Aquinas

by Akira Yamada

The distinction established by St. Thomas Aquinas between ESSE and ESSENTIA has been shifted by later scholastics to the distinction between EXISTENTIA and ESSENTIA. The aim of this study was to clarify whether ESSE may rightly be identified with EXISTENTIA, by conducting a thorough examination of the various usages of the terms ESSE and EXISTERE throughout the main works of Saint Thomas Aquinas.

The conclusions arrived at are as follows:

1) ESSE is not "actus existendi" but "actus essendi". In itself a potency to ESSE, ESSENTIA becomes not only an actual existence but also an actual essence through its actualisation by ESSE. For example, the ESSENTIA of a horse through its actualisation by ESSE not only actually *exists* but also actually *is* a horse. Thus "actus essendi" may connote "actus existendi", but these are not to be identified with one another.

2) (a) EXISTERE etymologically means "to stand from out....". We should say that EXISTENCE stands from out the actualisation of



ESSENCE by ESSE; thus the same ESSENTIA is to be found under different modes of existing according to different ESSE through which it is actualised. For example, the ESSENTIA of a horse, when actualised through real esse, comes into real existence in accordance with the mode of real being (“*equus existit in rerum natura*”); whereas when actualised through intellectual esse, it comes into intellectual existence in accordance with the mode of intellectual being (“*conceptus equi existit in intellectu*”).

(b) On the other hand, the same ESSE may appear under different modes of existing according to different ESSENTIA which it actualises. For example, the ESSE as such of a complete human being and of a separated human soul is the same, but the ESSENTIA actualised in each case is not the same, for the former is a perfect essence (“*essentia composita ex anima et corpore*’,) whereas the latter is an imperfect one (“*essentia animae separatae*”); so that their modes of existing are not the same.

3) ESSENTIA is related to ESSE as a potency to an act, whereas EXISTERE is related to ESSE as an effect to a cause.

So that it would seem legitimate to remark that the identification of ESSE with EXISTERE would lead to serious misunderstandings as to the very meaning of ESSE in Saint Thomas Aquinas.

\* For the Japanese original of this article, see Vol.XXXVIII, No. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 8, & 9.